鈴木　勝先生のご逝去を悼む

谷津三雄

日本医史学会名誉会員、日本歯科医史学会理事長、日本大学名誉総長鈴木勝先生には昭和六十二年八月五日肺炎のため逝去された。先生は明治三十六年三月十日福島県に生れ、昭和二年日本大学専門部歯科を卒業、同十八年四月教授（放射線学）になられ、同二十七年四月から同四十五年三月までの十八年間、歯学部長、またこの在任中に六年間学長を兼ね特に昭和四十三年五月に発生した日大紛争時には学生担当として紛争を収拾し、学園の正常化を成し遂げられた。同四十四年九月には初の公選制による総長選挙で第六代目日本大学総長に選任され五期十五年間その任にあり建学の精神を中核に歴史と伝統をふまえ教育に研究にそして大学の管理運営にあたられその卓抜した指導力と教育に並々ならぬ情熱を傾注され同五十九年九月に名誉総長になられた。その間、同四十六年一月には新設の日本大学松戸歯科大学学長を兼ね、口腔を全身のひとつとして対応のできる歯科医師の育成を目的として創設された。その他日本大学理事長、同原子力研究所長、同総合科学研究所長、日本歯科医学会会長、医道審議会委員、大学設置審議会会長、歯学教育基準分科委員長、日本学術会議会員、日本相撲協会横綱審議会委員などその活動分野は極めて広く、特に発足以来二年目の「歯学史集談会」が中心となり、第十一回蘭学資料研究大会と合同で第七十回日本医史学会総会を先生が会長となり、昭和四十四年五月二十三日から三日間、当時なお学園紛争の後遺症のただようなか日本大学歯学部を会場として行われたことは今も濃い印象として残っている。また昭和五十五年十月十～十二日にも先生が会長となり、第八十一回日本医史学会総会の名称で、第八回日本歯科医史学会と第二十五回日本薬史学会と同時に開催された。このような医歯薬合同史学会の同時開催は八十年間の日本医史学会の歴史にもないことであった。これはひとえに先生の厚き人望と先生がいかに医史学に情熱を傾けていたかを知ることができる。このように先生の偉業を讃えるには千万言を費やしても足りませんが、これらの活躍と業績に対し昭和四十八年

鈴木　勝先生

四月二十九日、勲一等瑞宝章を受章、この度、従三位に叙せられた。ここに亡き恩師鈴木勝先生の遺徳を偲び、冥福をお祈り申し上げ、この一文を捧げます。

高木圭二郎先生のご逝去を悼む

谷津三雄

日本医史学会評議員、日本歯科医史学会名誉会員、前東京歯科大学学長高木圭二郎先生は、昭和六十二年八月二十六日突然心不全のため逝去された。先生は大正二年四月二十八日東京都に生れ、昭和十年三月東京歯科医学専門学校を卒業され、直ちに同校副手、助手として口腔外科学教室に勤務し、歯科臨床に従事されていたが、昭和十三年六月学校の命により厚生省に出向し厚生省予防局事務取扱いを委嘱。これが医療行政に従事された始めである。その後昭和十七年十一月満州国ハルピン医科大学教授として口腔衛生学及び口腔外科学担当。同二十二年十二月再び厚生省医務局国立病院課に復帰。同三十八年四月医務局歯科衛生課長に就任。同三十八年十一月厚生省を退職。直ちに東京歯科大学教授に就任。医事法制を担当。同四十三年十二月社会歯科学研究室を創設し主任教授となり、わが国では始めての新しい講座を開設された。同五十二年六月同大学副学長。同五十八年六月同大学学長に就任。同六十一年五月学長の任期満了に伴い同大学を退職。同大学名誉教授の称号を授与された。

高木圭二郎先生

この間、約二十年厚生省において医療行政に従事され、また、その後、二〇年余にわたり歯学の教育、研究に従事し、社会歯科学の権威として、しかもその中に歯科医学史や歯科医師の倫理性を包含するなどの歯科教育界において特色ある教育をなされた。その大集成が自著『歯科医師の倫理と法律』であり、多くの歯科大学において教科書として使用されている。学会においては日本口腔衛生学会評議員、幹事、日本歯科医療管理学会理事、日本医史学会評議員、日本歯科医史学会理事を経て名誉会員、また、第十五回日本歯科医学会総会では副会頭として務められ、今でもその業績は高く評価されている。

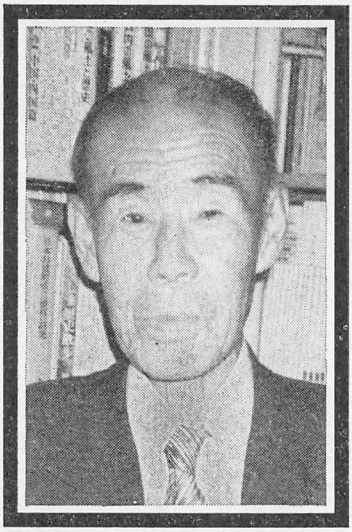
先生の広い視野と崇高な人柄、教え子に対する深い愛情は多くの人々に敬愛の念をもって迎えられていた。

昭和六十二年春には勲三等旭日中綬章を受章され、その受賞祝いを大学では八月二十六日に行う予定としていたが、その日突然として他界されてしまったのである。この度、先生の教育の貢献に対して正五位に叙せられた。ここに卑文を草して亡き先生を偲び心から在天の御霊の安らかに眠られんことを祈ります。

今市正義さんを偲んで

福島義一

日本医史学会会員名簿をひもどいてみても判るように、四国は医史学の未開拓地である。そして、わずか数名にすぎない会員の中でも、今市さんは二番目に古い会員である。



今市　正義氏

実は、私が大阪から徳島へ移転して来て間もなく今市さんを識り、御紹介して入会された。それから、私は今市さんの医史学に対する熱情と世話好きにほだされ、故中野操先生に申し出て学会評議員にも推せんしていただいた次第である。

今市さんの本職は医師ではなく、古い放射線技士の草分け的存在で、したがってその研究領域は放射線医学史およびその技術史であって、多くの研究結果を発表されている。私は専門外であるが、「本県放射線科の過去と現在」『徳島県医師会史』昭和五十一年、「徳島放射線科学」『技術文化史年表』、「医学放射線技術」『日本人名大事典』平凡社、など知っている。また、郷土史研究として終生にわたって新開氏の調査をつづけられた。その成果を成書として発刊されずに逝かれたことは、誠に残念である。

家庭的には余りめぐまれなかったようで、孤高の学究的生涯を終られたことは淋しかったと思う。

私は、数少い四国の会員今市さんがなくなられたことを心からかなしみながら、若き日、ともに医史資料をもとめてあちこち歩きまわった当時の元気な御姿を思いうかべながら、筆を擱きます。合掌。

弔辞

江川義雄

今はなき大先輩、佐藤美実先生のご霊前に先生と因縁深き郷土の地広島から、関係団体であります広島県医師会、日本医史学会広島支部を代表し、お別れの言葉を述べさせて頂きます。

先生の遙か後輩であります私は、奇しくも先生ご逝去の日、九月十六日に先生が昭和四十四年に校長に就任されました広島医学技術専門学校において、医学概論の講義をする日でありました。講義の始めに、この学校の初代校長であられた先生のご逝去に弔慰を表して生徒と共に黙禱を捧げました。それから先生の科学者として医者として歩まれた道、医の倫理に憧がれ、先生の師である富士川游先生への師事とその業績につき触れて、その際持参しました先生の著書である『職業婦人の健康問題』『概説産科婦人科学史』を回覧したのであります。佐藤先生との出会いは、戦後間もない時神戸市にて日本産科婦人科学会の会場で細胞形態学について私が展示発表のおりでありました。当時先生は三楽病院医長でフランス学派のホルモン研究の第一人者と目され、専門誌にその論文が連載されていた高名の学者であられたのです。郷土の大先輩であられたことをはじめて知り、それ以来、郷土の広島医学医史学、産婦人科学とご指導を賜わりました。

佐藤　美実先生

先生は明治二十八年八月二十八日、現在は広島の原爆々心地であります広島市猿楽町に出生され、大正七年岡山医学専門学校卒業後東大医学部近藤外科に入局、同年産婦人科の木下教授に師事され、爾後産婦人科学を専攻されてきました。昭和十二年には東大医学部産婦人科の講師に就任されました。東大医学部以外の出身者でこのポストにつかれたことは、いかに先生が非凡な努力を傾注され、勉学されたかが推察できるのであります。

昭和十六年より三楽病院医長として昭和三十七年の退職まで勤務されておられました。また昭和八年から師・富士川游先生のご推挙で日本女子大教授として社会衛生学、社会医学の講座を担当されておられました。

欧州留学は昭和五年より一年余パリー大学でラジウム治療学を学び次いでベルリン大学、ミュンヘン大学で産婦人科学を研究され、欧米先進国の産婦人科学を見学し帰朝され、その成果は後年編集刊行された先生の著作の中にうかがい知ることができるのであります。

その一例としまして放射線治療学としての『キュリー療法』、婦人労働問題を扱われた『職業婦人の医学』、フランス留学中のエッセンスである『女性ホルモンの生理と臨床』、貴重な資料的価値のある『概説産科婦人科学史』などがあげられるでありましょう。

郷土広島に関連した医史学会や広島医学につきましては先師・富士川游の精神継承者の自負と情熱は逞ましく、医史学発祥地とも称すべき広島にその学術的活動の低調さを指摘されて、ご叱応ご助言は度々いただきました。その都度私達後進の者達は、機未だ熟さずとの消極的な態度で先生のご機嫌をそこねてご心配をお掛け致しておりました。昭和六十一年広島県医師会はその創立九十周年を迎え、併せてこの機に第八十七回日本医史学会総会を広島の地に開催することができました。

佐藤先生は戦前戦中を通じ広島医師会に対して中央との学問的パイプをつなぎ、よくお世話され医学の良き伝統を創り上げられた功労者でありました。昭和四十一年広島県医師会史編纂には強力な委員として参画され、また『広島医学』に度々医人伝・医の倫理に関しての寄稿は医師会創立記念、医史学会総会には先生のご臨席もと会員等しく待望しておりましたが、先生は既に健康を損われ、この盛儀に列せられなかったことは返す返すも残念でなりません。しかし先師富士川游先生の顕彰碑には先生がその碑文を撰せられ、その名文は、先生の肉体がよし亡ぶとも学問を通した師弟愛と郷土愛は燦然たる光芒に輝き、とことわに語り伝えられていくでありましょう。

佐藤先生、安かにお眠り下さい。

瀬戸俊一先生のご逝去を悼む

谷津三雄

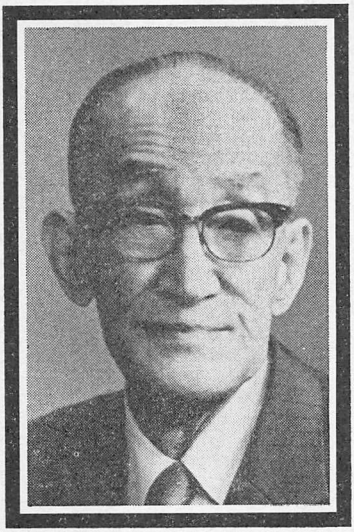
日本医史学会名誉会員、日本歯科医史学会名誉会員、瀬戸俊一先生は昭和六十二年十一月二十二日糖尿病から急性気管支炎を併発し急逝された。享年八十四歳。先生は明治三十六年四月十二日、静岡県に生れ、昭和二年三月東京歯科医学専門学校（現東京歯科大学）を卒業され、直ちに文部省歯科医師試験附属病院（通称文部省歯科病院、院長島峯徹）に入局したが、この文部省歯科病院は昭和三年十月に東京高等歯科医学校（現東京医科歯科大学）となり、保存・治療科の副手、助手を経て昭和十五年に専任講師（教授、檜垣麟三）となり同三十三年に医学博士を授与され、同年東京都練馬で開業された。昭和三十九年神奈川歯科大学（学長檜垣麟三）の開設されるや非常勤講師として歯科医史学の講義を担当し、続いて東京医科歯科大学歯

学部、城西歯科大学、岩手医科大学歯学部においても歯科医史学を講じられた。なかでも晩年になって眼を患い視力が消失し不自由の身となったが、ご令室に手を引かれながら東京から岩手医科大学にまでおもむき教壇に立ち続けるなど、こよなく歯科医史学を愛された先生でありました。

また先生は誠実一路に人に尽され特に後輩に対しては学資、結婚、開業等あらゆる面で相談にのりよく面倒をみられるという人情の厚いご性格でもありました。したがって多くの人々の尊敬を一身に集められておりました。一方日本歯科医師会、東京都歯科医師会の学術委員長としてはやくから歯科医師の生涯教育にも類をみない情熱を傾倒されました。

日本歯科医史学会の前身の歯学史集談会（昭和四十二年一月発足）においては故人になられた今田見信、鈴木勝、高木圭二郎らの先生とともにその結成に尽力された影の力は高く評価されております。

私は長崎大学医学部においてシーボルト来日百五十年記念式典を併催行事として行われた日本医史学会に今田先生と三人で参加したとき、出島のシーボルト記念館の見学をはじめ原爆の災害跡を見廻った当時がつい最近の出来事のように思われてなりません。先生は晩年糖尿病を患い盲目の生活を余儀なくされましたが歯科医史学に対する情熱を失うことなく度々お電話で将来に対する激励をうけた在りし日の様々な思い出が走馬燈のごとく胸裏を去来しますが、先生のご遺志を受け継ぎ、予想される流動の激しい日本の将来に史眼を通じ処して参ることを誓い致し先生の霊安らかに冥目されますことを祈ってこの一文を捧げます。



瀬戸　俊一先生

鈴木宜民氏を偲ぶ

藤平　健

鈴木宜民千葉大学医学部名誉教授は、明治四十二年九月に静岡県に生まれ、静岡中、旧制静岡高を経て、昭和十一年千葉医科大学を卒業された。同郷の先輩であり、親戚でもあった伊東弥恵治授が主任であった眼科学教室に入り、昭和二十三年十二月には日本医史学会評議員、昭和二十四年十一月には千葉医科

大学助教授、昭和三十年七月には千葉大学教授となった。

昭和四十三年には第十九回日本東洋医学会総会長として、昭和四十五年六月には第七十一回の本医史学会総会会長としてそれぞれ活躍され、学会の発展、学問の向上に多大の貢献をなされた。

氏は所謂蒲柳の質で、在学中も御卒業後も数回にわたって入退院をくりかえされたようである。それにも拘らず七十八歳という予想外の寿命を保たれたのは、世にいう一病息災で、きめこまかに健康に留意されたからであったにちがいない。

氏は、そのきめこまかに健康に気を配ることの出来る人であった。からだが弱くても、暴飲暴食をしたり、つい無理をしてしまう、というようなことをして、予想通りに早く逝ってしまう人もいる。氏は、そのどちらをも制することの出来る人であったようである。

鈴木　宜民先生

氏はそのように自制心の強い人であり、また同時に温厚という世評のうらに、頑固という反面も持っていた人であった。かくして氏は予想以上の長寿をたもたれたのであったのだと思う。

氏は教授在職二十年の間に、門下から多くの教授や俊秀を育て上げられた。これは眼科学学会や眼科医会関係の人々には広く知られている所である。

氏がこのほかに、医史学や東洋医学に関しても、多くの貢献をしていることは、あまり知られてはいないのではなかろうか。医史学に関しては恩師の伊東弥恵治教授がその方に熱心であったから、次第に影響されたのではなかろうか。昭和四十五年に第七十一回日本医史学会総会会長として行った会長講演には、強い感銘をうけたことを覚えている。

漢方に関しては、氏がどのような契機から眼疾患に漢方の処方を使うようになったのかを、私は知らない。ただわかることは、氏の漢方は眼科だけに関する漢方であって、私どもがやってきている『傷寒論』をもととした漢方ではなかった、ということである。

太平洋戦争が次第に苛烈を増しつつあった昭和十八年頃、東京全体が空襲のために、いつ焼野っ原になるかもしれない、そうすれば貴重な漢方医書の大部が灰燼に帰する、そうなる前に

少しでも多くの漢方医書を千葉医大に運んでおかねばならない、と決心された伊東弥恵治教授は、鈴木宜民講師に旨を含めて、東京の古籍商から、それらの本を手当り次第に買入れるように指示された。

このようにして買い入れられた古書は、その数七千余冊、その中には多数の貴重な古書籍がある。このようにして集められた厖大な古書を、氏は整理し、目録を作られた。大変な努力であったに違いない。苛烈な戦争のさなかにも拘らず、このような忍耐と努力を必要とする収集と整理を遂行されたことは、氏の御性格が、いかに誠実かつ実直であったかを物語って余りある。

氏は、氏の人生のかなりの年限を、病気と渡り合った人だけに、死と直面しても、いささかもたじろがなかったようである。のちの後任教授の安達恵美子教授の弔辞に、「『もうだめだよ』。だって先生、ウメボシもおいしくたべられてるし。先生はこたえて、戒名も作ったよ、遺言も書いた。みてくれるかなって。そんなものみたくないと申し上げると、淋しそうに笑っておられました。気管切開をされる程重態になられたあとは筆談で、人間は生きる権利と同時に、死ぬ権利もあると、何度も、ほんとに苦しかったんですね先生」とある。まさに、すべてを悟った人の大往生ぶりである。

温厚篤実を画にかいたような人というのは、まさに氏のような人のことをいうのであろう。

先生、どうぞ天界で、やすらかな、そして楽しい日々をお送り下さい。合掌